

古典短歌における敬語の実態とその特質

——短詩型文学としての短歌における敬語をどう考えるか——

坂 本 元太郎

一

意図および目的

国文学において、短歌は俳句とともにもっともスペースが限られているという点で、短詩型文学と言われている。短歌が三一音節から構成されているという宿命的事実が、どんな理由に基づくにせよ、それが即、文学としての短歌の特色と限界とを負担していることにつながっているわけである。一般に、よく言われていることではあるが、俳句は叙述できない文学であるのに対して、短歌は叙述を必要とするものであり、叙述が完成していなければならぬ文学である。となると、短歌は定型詩としての限界を前提にしながら、長歌や物語とは異なった叙述を意図しなければならぬことを意味する。この相容れない二つの問題を止揚するためには、ほかのジャンルと大き

く異なった、短歌自体の発想や表現態度が必要となり、それに基づいた具体的な表現方法が求められるに至るわけである。こうした短歌独自の宿命を背景として、時には主語の大胆な省略とか、逆に述語を読者に暗示的に捉えさせるなど、いくつかの方法が確立された。

したがって、定型詩としての短歌には、短歌独自の生理的リズムや叙述があるべきで、省略・倒置・引用などの変化の技法、詠嘆・誇張・対照などの強調の技法、さらにまた擬人・直喩・隱喩などの比喩の技法が取り入れられて、短歌的叙述が完成されているのである。これと関連して短詩型文学として、より切実な問題として考えられなければならぬことは、限られた詩型のなかで、いかに最大限の事がら、つまり情報を負担させるかという点である。そのためにこそ諸種の技法が要請されてくるのは当然であるとしても、それとは異なる次元の問題として、短歌における敬語使用とスペースとの関係が考えられる。敬語はナニ（論理内容）を言うかに主目的があるのではなく、ドノヨウニ（倫理関係）言うかに重点が置かれたものであるから、敬語と普通語との間には、待遇的意義において違いはあっても、実質的な情報量（論理内容）という点では全く増減や変化がない。したがって、敬語を用いるということは、一定の情報量に待遇的な意義を付加するにとどまるものであるに過ぎない。以上の観点からすると、限られたスペースを持った短歌において、敬語を使用することはそれ自体、一般的な意味で望ましいことではなく、敬語使用の分だけ情報量がせめられる結果を招きかねないという仮説が成立する。しかし短歌に敬語が使用されるといふ現象が極端に少ない事情には、複雑な理由があるので、以上の理由のみで説明することは当を得たものではないにしても、一つの仮説として妥当かどうか検証しなくてはならないことは確かである。

短歌に敬語が使用されない事実——使用されるにしても極端に少ない事実について、その理由を解析することも必要ではあるが、実際にはどんな敬語がどんな表現形式で、どの程度の頻度で用いられているのか、といった敬語使用の実態について考察してみることも、その前提として重要な作業である。古典短歌をその対象として考察を加える前に、まず現代短歌についてその傾向を把握することにした。全く無作為的に敬語を含む短歌三五首を次に掲げるが、作者の選択も歌数もともに任意であることをあらかじめお断りしておく。

- 1 父君よけさはいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり
(落合直文)
- 2 のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり
(斎藤茂吉)
- 3 我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まれ乳足らひし母よ
()
- 4 聖の子がいのりさゝぐる天壇と夏雲めぐる朝の妙香
(尾上柴舟)
- 5 藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも
(正岡子規)
- 6 焼太刀のほさきかませる皇子の御面しぬばゆ岩屋をろがめば
(伊藤左千夫)
- 7 蟋蟀や四十二にしてはてませる師がおん墓の夕ぐれの路
(与謝野寛)
- 8 父母にいとま申さで家離り東へ行かん時にはなりぬ
()
- 9 手をたまへ梨の花ちる川づたひ夕の虹にまぎれていなむ
()
- 10 秋かぜにふさはしき名をまゐらせむ『そぞろ心の乱れ髪の君』
()
- 11 きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩に有りとも思ふ
(与謝野晶子)

12 わが心よし狂ふとも恋人よ君が口よりをしへたまふな

(与謝野 晶子)

13 ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経よます寺

()

14 すねてくみことばきかずよそを向き椎の葉ひろひ野菊つみし朝

()

15 おもかたびにわかき血さわぐ君が御名よ春行く宵のしら藤の花

()

16 ゆるし給へあらずばこそ今のわが身うす紫の酒うつくしき

()

17 人にそひてしきみさゝぐるこもり妻母なる君を御墓に泣きぬ

()

18 恋の神にむくひまつりしけふの歌ゑにし神はいつうけまさむ

()

19 湯あがりを御風めすなのわが上衣ゑんじむらさき人うつくしき

()

20 さばかりの清き御胸にしび入りし罪の子この子こらしめたまへ

()

21 細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の神

()

22 なほ許せ御国遠くば夜の御神紅盃べにざらふね船に送りまらせむ

()

23 経はにがし春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ

()

24 春の国恋の御国のあさぼらけしるきは髪か梅花のあぶら

()

25 ふしませとその間さがりし春の宵衣桁にかけし御袖かつぎぬ

()

26 鎌倉や御仏なれども釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

()

27 御相いとど親しみやすきなつかしき若葉木立の中の盧遮那仏

()

28 讀ぜむに御名は知らず大男花に吹かれておはす東大寺 (与謝野 晶子)

29 花のあたりほそき滝する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月 ()

30 木曾の朝を馬子も御主も少女笠鞍に風吹くあけほの染に ()

31 シルクハットの県知事さんが出て見る天幕の外の遠いアルプス (北原 白秋)

32 ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海にとられむ (若山 牧水)

33 ころもに眼とちたまへ春の日は四方におつる心地せられむ (前田 夕暮)

34 吾が病癒えなばゆきて奥津城に居給ふ君をゆりておこさむ (中村 憲吉)

35 むかへ火の炎立ちは揺れぬ今ここに亡き子が霊の参り来らしも (松村 英一)

以上、三五首の短歌は、結果的には与謝野晶子の歌が二〇首の多きを数え、それ以外の歌が一五首となって、いささかバランスを失した嫌いはあるが、全体的に言えることは、現代短歌で敬語を含むものが、予想したとおり実に少ないという事実である。右の例に徴するかぎり、敬語を使用している短歌は、人間関係に基づくもの(1237 8 13 17 19 31 32 34 35などにその典型をみる)、神仏などに関係あるもの(18 21 22 23 26 27 28)、恋愛感情に支えられた浪漫的なもの(9 10 11 12 15 16 25など)に顕著であるが、人間関係に基づく歌と恋愛感情に支えられた歌とは重なり合うことが多いのは当然で、一線を画して考えることはできない。与謝野晶子の歌は、その官能的・唯美的・浪漫的歌風から考えても、人間を素材としている場合が多いので、待遇表現としての敬語が多用されることも一応首肯できることである。晶子の文体について小林英夫氏は『文体論の理論と実践』において、語彙の面では春が多数を

占め、時刻では夜と夕方が、色彩では紅紫色と白がそれぞれ多い事実を指摘し、一方、修辭面では名詞どめ・助動詞「ぬ」どめ・形容詞連体形「き」どめ・助動詞「し」どめが多く用いられている点にも触れながら、晶子の作家的資質や才能に言及している。しかし同時にまた、語彙的・文法的事実としての敬語多用の現象も見落としえない一つの傾向と考えるべきであろう。

現代短歌全体を通して、著しく敬表現がみられない事実が一方にありながら、他方では一つの短歌のなかに二ないし三の敬語が用いられている場合も散見される。右の引用歌について考察すると、

歌番号	敬	語	歌番号	敬	語	歌番号	敬	語
3	たまひ	(生ま)し	18	まつり	まさ	25	ませ	御袖
5	みかど	みかど	19	御風	めす	26	御仏	おはす
7	ませ	おん墓	20	御胸	たまへ	28	御名	おはす
13	おん国母	す	21	御手	たまへ			
17	さゝぐる	御墓	22	御国	御神			
					まゐらせ			

という結果となるが、この中での一〇首が晶子の短歌ということになる。敬表現を用いるか否かは、短歌にあっては極めて任意性の強いもので、情報や論理を若干犠牲にしても敬表現を用いる場合もある一方では、始めから人間関係を疎外して敬語なしですませる場合もあって一様ではない。たとえば母を素材とした茂吉の短歌(2・3)には、母に対する敬表現がなされているが、

わがために蚕室こむろきよめて床のぶるたらちねの母腰かがまれり

(文明)

其子等に捕へられむと母が魂たま蛸と成りて夜を来たるらし

(空穂)

の二首には、素材が同じく母であるのに敬表現が用いられていないといった具合である。

ところで短歌は三一音節からなる定型詩で、スペースに限りがあるから、装飾的で非生産的(論理に無関係という意味で)敬語は用いられることが少ないのだ、と言う仮説は、一応首肯できそうな点もあるが、果たして一概にそのように短絡的に考えてよいものであろうか。その当否をめぐって一つの結論を導き出すプロセスとして、短歌における敬表現のあり方と実態とについて検討を加えてみることにする。

敬表現はその形式からみると次の三種類が考えられる。

- (一) 別語方式(交替形式)
- (二) 接語方式(添加形式)
- (三) 併用方式(混合形式)

別語方式とは、敬表現に際して特別の単語(動詞・代名詞・名詞など)を用いるもので、たとえば、「言ウーオッシャル」・「来ルーイラッシャル」のように、普通語に対応する敬語をもって置きかえる方法である。接語方式とは、普通語に特別な単語(助動詞・補助動詞・接辞)を添加することによって敬語化するもので、たとえば、「来ルー来ラレル」・「帰ルーオ帰リニナル」・「手紙ーオ手紙」・「山本ー山本サン」の例がそれである。また併用方式とは、一つの語が別語方式にも接語方式にも機能するもので、たとえば、「来ルーイラッシャル・オイデニナ

ル・コラレル」などがそれである。したがって基本的には敬表現の方式は別語方式と接語方式との二つに要約することができるのであるが、たとえば古典文などにおいても、
 うへのこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐたまひて、ものなど奏したまふ。
 (『枕草子』清涼殿の丑寅の隅の)

おとど樋殿におはしけるままに落窪をさしのぞいて見給へば、なりのいとあしくて、さすがに髪のいとうつくしげにて、かかりてゐたるを、あはれとや見給ひけむ……。
 (『落窪物語』)

のように二つの方式による敬表現が混用されている。定型詩としての短歌の場合、その敬表現の形式としては、どちらかといえば、接語方式よりも別語方式による方が、スペースをとることが少ないので、多用される傾向にあると考えるのが常識であろうが、その実態について前に掲げた三五首の現代短歌を対象に考えてみると次のようになる。

例	別語方式		接語方式	
	動詞	名詞(接辞)	補助動詞	助動詞
④さゝぐる ⑧申さ ⑨たまへ ⑩まゐらせ	①父君 ⑤みかど・みかど ⑥御面 ⑦おん墓	②たまふ ③たまひ ⑦ませ ⑫たまふ	③し ⑬す	

以上の分析結果から、次のような事実が帰納される。

* 別語方式による敬表現(7)に対して、接語方式による敬表現(42)が圧倒的に多いこと。

古典短歌における敬語の実態とその特質

計	歌 番 号 と 敬 語
7	<ul style="list-style-type: none"> ①7 さゝぐる ①9 めす ③5 参り来
23	<ul style="list-style-type: none"> ①1 御手 ①3 おん国母 ①4 みことば ①5 御名 ①7 御墓 ①9 御風 ②0 御胸 ②1 御手 ②2 御国・御神 ②4 御国 ②5 御袖 ②6 御仏 ②7 御相 ②8 御名 ②9 御寺 ③0 御主 ③1 県知事さん
17	<ul style="list-style-type: none"> ①6 たまへ ①8 まつり・まさ ②0 たまへ ②1 たまへ ②2 まゐらせ ②3 たまへ ②5 ませ ②6 おはす ②8 おはす ③2 たまふ ③3 たまへ ③4 給ふ
2	

* 敬語名詞を構成する接辞（接頭語・接尾語）が多用（23）され、とくに接頭語がほとんど（21）を占めていること。

* 品詞的には、動詞と考えるべき補助動詞の例が多く（17）、なかでも尊敬語（15）に対し、謙讓語（2）が少ないこと。

* 接辞による敬語名詞の中で、接頭語を添加した語例はほとんど晶子の歌（17）であること。

* 名詞を除外して考えても、別語方式（7）よりも接語方式（19）のほうが多用されていること。

現代短歌全体を上記三五首の分析結果によって律することは当を得たものではないし、実証的科学的な態度ではないにしても、一つの傾向が暗示されているように考えられる。本稿は標題にもあるように、古典短歌における敬語が、どんな事情にあるかを明らかにする点に意図があるので、以上の現代短歌の考察は、一つの問題を提起したにとどまるものである。すでに述べたことと重複するが、右の結果にもあるように、動詞（補助動詞をも含む）二四語中、一七語が接語方式であるという事実や、全体として別語方式と接語方式の比が7対42となっている事実から考えると、短詩型文学である短歌だから敬語を用いる余裕がないとする仮説にはいささか問題が残りそうである。この点に関しては、古典短歌を考察した上で考えをまとめたい。

王朝の短歌では、後述するように敬語を用いた歌が極端に減少するのであるが、万葉集短歌ではどのような傾向が見られるであろうか。万葉集における短歌（四二一二首）のみを対象として考察をすすめるにあたって、次のような基準を設けて統一を図った。

* 敬語名詞のなかでも、皇室敬語に関する次のような語は、使用頻度が多いので除外した。

天皇 王 皇神 帝 君 大君 みこ 皇 みこと 皇女 大皇 (ナド)

* 同様に「わ(あ)が主」「せの君」の類も除外した。

* 「思はず」の場合は「思ふ」の未然形に助動詞(尊敬)「す」が添った形とみて二語とし、「思はず」の場合は、音韻変化から考えて一語の敬語動詞として処理した。

* 「宣らす(告らす)」の場合は、別に「宣る(告る)」という動詞があるので、動詞に尊敬の助動詞「す」が添った形とみて二語とした。

* 「聞かす」と「聞こす」の場合も、前者は二語、後者は一語の動詞とした。

* 尊敬の助動詞「す」が添って音韻変化を起こした「けす(着る)」「めす(見る)」「をす(ある)」「なす(寝)」「せす(す)」などは一語として処理した。

* 敬語名詞を構成する「御」の待遇的意味については、歌との関連でそのつど判断した。

* 補助動詞は品詞分類としては動詞として処理した。

* なお本文は、『日本古典文学大系』(岩波書店)によった。

(1) 敬語の用例と種類・品詞

* 敬語には傍線を施し、種類については、三分法により尊敬語A・謙讓語B・丁寧語Cとし、品詞については、動詞1・助動詞2・名詞（接辞の添うたものも含む）3とし、それぞれ記号または番号で表わした。

卷一

- 四 たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野 A・2
- 七 秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の仮廬かりいほし思ほゆ C・3
- 九 莫囂圓隣之大相七兄爪湯気わが背子がい立たせりけむいっかし嚴いっかし檀が本 A・2
- 一一 わが背子は仮廬かりいほ作らす草無くは小松が下の草を刈らさね a bとも A・2
- 二三 打ち麻そを麻ま統むす王おのおきみ海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります A・1
- 二四 うつせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈りをす A・1
- 三三 ささなみの国つ御神の心さびて荒れたる京見ればし悲しも A・3
- 四九 日並皇子の命の馬並めて御獵a立bたしし時は来向ふ aはA・3 bはA・2
- 七七 わご大君物な思aほし皇神のつぎて賜bへるわれ無けなくに a bとも A・1

卷二

- 九二 秋山の樹の下隠り逝く水のわれこそ益さめ御思よりは A・3

- 九六 み薦刈る信濃の真弓わが引かば貴人さびていなと言はむかも
- 九七 み薦刈る信濃の真弓引かずして弦はくる行事を知ると言はなくに
- 一一一 古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く
- 一一三 ^aみ吉野の玉松が枝は愛しきかも君が御言を持ちて通はく
- 一二八 わが聞きし耳によく似る葦のうれの足痛くわが背勤めたぶべし
- 一四七 天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり
- 一五一 かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを
- 一五二 やすみししわご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀の辛崎
- 一六八 ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも
- 一七一 高光るわが日の皇子の万世に国知らさまし島の宮はも
- 一七二 島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさずとも
- 一七三 高光るわが日の皇子のいましせば島の御門は荒れざらましを
- 一七四 よそに見し檀の岡も君ませば常つ御門と侍宿するかも
- 一七六 天地と共に終へむと思ひつつ仕へ奉りし情たがひぬ
- 一七八 ^aみ立たし^bの島を見る時にはたづみ流るる涙止めそかねつる
- 一八〇 ^aみ立たし^bの島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで
- C・3
C・3
C・3
aはC・3 bはA・3
A・1
A・3
A・3
A・3
A・3
A・3
A・2
A・3
A・1
aはA・1 bはA・3
aはA・1 bはA・3
B・1
aはA・3 bはA・2
aはA・3 bはA・2

- 一八一 ^aみ立^bたしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも
- 一八三 わが御門千代永久とこばに栄えむと思ひてありしわれし悲しも
- 一八四 東の滝の御門aに伺侍bへど昨日も今日も召すことcもなし
- 一八六 一日には千たび参りし東の大き御門bを入りかてぬかも
- 一八七 つれも無き佐太の岡辺に帰り居ば島の御階はしに誰か住まはむ
- 一八八 朝曇り日の入りぬればみ立aたしの島に下り居て嘆きつるかも
- 一八九 朝日照る島の御門におぼほしく人音もせねばまうら悲しも
- 一九一 けころもを春冬設まけて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも
- 一九八 明日香川明日だに見むと思へやもわご王の御名忘れせぬ
- 二〇〇 ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らず恋ひ渡るかも
- 二〇二 哭沢なきさわの神社もりに神酒みわすゑいのれどもわご王おおきみは高日知らしぬ
- 二〇五 王は神にし座aせば天雲の五百重いほへが下に隠り給ひぬ
- 二〇六 ささなみの志賀さざれ波しくしくに常にと君が思ほせりける
- 二二二 沖つ波来よる荒磯しきたんを敷しきたん考の枕まくらと枕まくらきて寝せる君かも
- 二三五 大君は神にし座aせば天雲の雷の上にいほ盧bらせるかも

aはA・3 bはA・2

A・3

aはA・3 bはB・1

aはB・1 bはA・3

A・3

aはA・3 bはA・2

A・3

A・1

A・3

A・2

A・2

A・2

A・2

A・1

A・1

A・1

A・1

A・1

aはA・1 bはA・2

- 二三七 否と言へど語れ語れと詔のらせこそ志斐いは奏せ強語しひがたりと詔る
- 二四一 皇は神にし坐ませば真木の立つ荒山中に海を成すかも
- 二四三 王は千歳に座まさむ白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや
- 二四四 三吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに
- 二四七 沖つ波辺波立つともわが背子が御船の泊り波立ためやも
- 二九五 住吉の野木の松原遠つ神わご大君のいでましどころ
- 二九五 昼見れど飽かぬ田児の浦大君のみこと恐かしこみ夜見つるかも
- 三〇七 はだ薄久米の若子が座しける三穂の石室いはやは見れど飽かぬかも
- 三一三 み吉野の滝の白波知らねども語りし継げば古へ思ほゆ
- 三二九 やすみししわご大君の敷きませる国の中には京師みやこし思ほゆ
- 三三〇 藤波の花は盛りになりにつけり平城の京を思ほすや君
- 三五三 み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけり見ゆ
- 三五五 大汝少彦名おはなむすくなのこなのいましけむ志都の石室いはやは幾代経ぬらむ
- 三六二 みさごゐる磯廻いそみに生ふる名乗藻のよし名は告らしてよ親は知るとも
- 三六三 みさごゐる荒磯に生ふる名乗藻のよし名は告らせ親は知るとも
- 三六八 大船に真梶しじ繁貫き大君のみことかしくみ磯廻するかも
- aはA・2 bはB・1

三七六 あきづ羽の袖振る妹を玉くしげ奥に思ふを見たまへわが君

A・1

三八一 家思ふところ進むな風守り好くしていませ荒しその路

A・1

四一五 家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ

A・1

四一八 豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさず

A・1

四二二 逆言の狂言とかも高山の巖のうへに君が臥せる

A・1

四四一 大君のみこと恐み大殯の時にはあらねど雲がくりま

aはA・3 bはA・1

四五四 愛しきやし栄えし君の座しせば昨日も今日も吾を召さましを

a bともA・1

四五七 遠長く仕へむものと思へりし君座さねば心神もなし

A・1

四五九 見れど飽かず座しし君が黄葉の移りい去けば悲しくもあるか

A・1

四七一 家離りいます吾妹をとどめかね山隠しつれ情神もなし

A・1

四七六 わご王天知らさむと思はねばおぼにぞ見ける和豆香そま山

A・2

四七九 愛しきかも皇子の命のあり通ひめしし活道の路は荒れにけり

A・1

卷四

四九一 河の上のいつ藻の花の何時も何時も来ませわが背子時じけめやも

A・1

四九六 み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも

C・3

五一四 わが背子が著せる衣の針目落ちず入りにけらしもわが情さへ

A・1

- 五二一 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな A・1
- 五三一 梓弓爪引く夜音の遠音にも君が御幸を聞かくし好しも A・3
- 五五四 古人のたまへしめたる吉備の酒病まばすべなし貫簀 賜らむ a bとも B・1
- 五五八 ちはやぶる神の社にわが掛けし幣は賜らむ妹に逢はなくて B・1
- 五六一 思はぬを思ふといはば大野なる三笠の社の神し知らさむ A・2
- 五六四 山菅の実成らぬことをわれに依せ言はれし君は誰とか宿らむ A・2
- 五七九 見まつりていまだ時だに更らねば年月のごと思ほゆる君 B・1
- 五八七 わが形見見つつ思はせあらたまの年の緒長くわれも思はむ A・2
- 五九〇 あらたまの年の経ぬれば今しはとゆめよわが背子わが名告らすな A・2
- 六一〇 近くあれば見ずともありしをいや遠に君が座さばありかつましじ A・1
- 六二四 道にあひて咲まししからに降る雪の消なば消ぬがに恋ふとふ吾妹 A・2
- 六三六 わが衣形見にまつる敷袴の枕を離けず巻きてさ寝ませ a は B・1 b は A・1
- 六五四 相見ては月も経なくに恋ふと言はばをそろとわれを思ほさむかも A・1
- 六五五 思はぬを思ふと言はば天地の神も知らさむ邑礼左変 A・2
- 六七〇 月読の光に來ませあしひきの山來へなりて遠からなくに A・1
- 六八〇 けだしくも人の中言聞こせかもここたく待てど君が來まさぬ a bとも A・1

卷五

- 六八八 青山を横切る雲のいちしろくわれと咲まして人に知らゆな
A・2
- 七〇〇 かくしてやなほやまからむ近からぬ道の間をなづみ参来て
a bとも B・1
- 七〇九 夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む
A・2
- 七一〇 み空行く月の光にただ一目あひ見し人の夢にし見ゆる
C・3
- 七二一 あしひきの山にしをれば風流なみわがするわざをとがめたまふな
A・1
- 七五九 いかならむ時にか妹を葎生のきたなき屋戸に入りいませなむ
A・1
- 七七九 板葺の黒木の屋根は山近し明日取りて持ち参り来む
B・1
- 八〇一 ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りてなりをしまさに
A・1
- 八一二 言問はぬ木にもありともわが背子が手馴れの御琴地に置かめやも
A・3
- 八一四 天地の共に久しく言ひ継げと此の奇 御魂敷かしけらしも
aはA・3 bはA・2
- 八五五 松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ
A・2
- 八五六 松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる子らが家路知らずも
A・2
- 八六四 後れ居て長恋ひせずは御園生の梅の花にもならましものを
A・3
- 八六九 帯日売神の命の魚釣らすとみ立たしせりし石を誰見き
a cはA・2 bはA・3
- 八七六 天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの
B・1

八七七 人もねのうらぶれ居るに竜田山御馬近づかば忘らしなむか

八七八 言ひつつも後こそ知らめとのしくもさぶしけめやも君いまさずして

八七九 万代にいまし給ひて天の下申し給はね朝廷去らずて

八八二 吾が主のみ靈賜ひて春さらば奈良の都に召上げ給はね

八九〇 出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも

八九五 大伴の御津の松原かき掃きてわれ立ち待たむ早帰りませ

八九六 難波津に御船泊てぬと聞え来ば紐解き放けて立走りせむ

九〇五 若ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ

卷六

九〇八 としのはにかくも見てしかみ吉野の清き河内のたぎつ白波

九一〇 神柄か見がほしからむみ吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも

九一一 み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまた還り見む

九一二 泊瀬女の造る木綿花み吉野の滝の水沫に咲きにけらずや

九一五 千鳥鳴くみ吉野川の川音なす止む時無しに思ほゆる君

九二一 万代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河内の大宮所

九二二 皆人の命もわれもみ吉野の滝の常盤の常ならぬかも

aはA・3 bはA・2

A・1

a b dはA・1

cはB・1

aはA・3

b c dはA・1

A・2

A・1

A・3

A・2

A・1

A・3

A・2

A・3

A・1

A・3

古典短歌における敬語の実態とその特質

- 九二四 み吉野の象山の際の木末にはここだもさわく鳥の声かも
 九二七 あしひきの山にも野にも御狩人さつ矢た挟みさわきたり見ゆ
 九二九 荒野らに里はあれども大君の敷きます時は都となりぬ
 九三四 朝風に楫の音聞ゆ御食つ国野島の海人の船にしあるらし
 九五〇 大君の境賜ふと山守す多守るとふ山に入らずは止まじ
 九五六 やすみししわご大君の食す国は倭もここも同じと思ふ
 九六二 奥山の磐にこけむし恐くも問ひたまふかも思ひあへなくに
 九八五 天に坐す月読壮子幣はせむ今夜の長さ五百夜継ぎこそ
 九八八 春草は後はうつろふ巖なす常盤にいませ貴きわが君
 九八九 焼太刀のかど打ち放ちますらをの禱く豊御酒にわれ酔ひにけり
 九九六 御民われ生けるしるしあり天地の栄ゆる時に遇へらく思へば
 一〇〇一 ますらはは御狩に立たし少女らは赤裳裾引く清き浜びを
 一〇〇六 神代より吉野の宮に在り通ひ高知らせるは山川をよみ
 一〇一二 春さらばををりをり鶯の鳴くわが山斎そやまず通はせ
 一〇一三 あらかじめ君来まさむと知らませば門にも屋戸にも珠敷かましを
 一〇三二 おほきみのみゆきのまにま吾妹子が手枕まかず月そ経にける

C・3
 C・3
 A・1
 A・3
 A・1
 A・1
 A・1
 A・1
 A・1
 A・1
 A・3
 A・1
 A・2
 A・2
 A・2
 A・1
 A・3
 aはC・3
 bはA・2

一〇三三 御食^けつ国志摩の海人ならし真熊野の小船に乗りて沖へ漕ぐ見ゆ

A・3

卷七

一〇七六 ももしきの大宮人のまかり出てあそぶ今夜の月のさやけさ

B・1

一〇九七 わが背子をこち巨勢山と人はいへど君も来まさず山の名にあらし

A・1

一一〇四 馬並めてみ吉野川を見まくほりうち越え来てそ滝に遊びつる

C・3

一一二〇 み吉野の青根が峯^{たけ}のこけむしる誰か織りけむ経緯^{たてぬき}なしに

C・3

一一三〇 神さぶる磐根^{いはね}ごごしきみ吉野の水分山^{みくまりやま}を見ればかなしも

C・3

一一三一 皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり山川清み

C・3

一一七一 大御船泊ててさもらふ高島の三尾の勝野の渚し思ほゆ(注)

A・3

一二一五 玉津島よく見ていませあをによし平城なる人の待ち間はばいかに

A・1

一二四七 大穴道^{おほなむちすく}少^a 御神^bの作らしし妹背の山を見らくしよしも

aはA・3 bはA・2

一三四九 かくしてやなほや老いなむみ雪降る大荒木野の小竹^{しの}にあらなくに

C・3

一三七二 み空行く月読^{つくよみ}壮士^{をさ}夕去らず目には見れども寄るよしも無し

C・3

一四〇九 秋山の黄葉^{もみぢ}あはれびうらぶれて入りにし妹は待てど来まさず

A・1

卷八

一四五二 闇夜ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや

a bともA・1

古典短歌における敬語の実態とその特質

- 一四五五 たまきはる命に向ひ恋ひむゆは君がみ船の揖柄かぢからにもが A・3
- 一四六〇 わけがためわが手もすまに春の野に抜ける茅花つばなそめして肥えませ a bとも A・1
- 一四六二 わが君にわけは恋ふらし賜りたる茅花をはめどいや瘦せに瘦す (注) B・1
- 一四九九 言繁み君は来まさずほととぎす汝なれだに來鳴け朝戸開かむ A・1
- 一五〇一 ほととぎす鳴く峯をの上の卯の花のうきことあれや君が来まさぬ A・1
- 一五二八 天の河相向き立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き設けな A・1
- 一五一九 ひさかたの天の河に船浮けて今夜か君が我が来まさむ A・1
- 一五二三 秋風の吹きにし日よりいつしかとわが待ち恋ひし君そ来ませる A・1
- 一五四四 ひこほしの思ひますらむ情こころより見るわれ苦し夜の更けゆけば A・1
- 一六一八 玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末うれわら葉に置ける白露 B・1
- 一六二〇 あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひそわがせし A・1
- 一六二一 わがやどの萩の花咲けり見に來ませ今二日ばかりあらば散りなむ A・1
- 一六二四 わが蒔ける稲田の穂立ち造りたる縷かづらそ見つつ俣まはせわが背 A・2
- 一六三八 あをによし奈良の山なる黒木もち造れる室いへは座ませど飽かぬかも A・1
- 一六七九 紀の国に止まず通はむ妻の社妻もり賜はにも妻といひながら (注) A・1

一六九五 妹が門入り泉川の常滑にみ雪残れりいまだ冬かも
 一七二六 難波瀉潮干に出でて玉藻刈るあまをとめども汝が名告らさね
 一七二七 漁あさりする人を見ませ草枕旅行く人にわが名は告らじ
 一七八六 ^aみ越路の雪降る山を越えむ日は留れるわれを懸けて俥はせ^b
 一八〇八 勝鹿の真間の井を見れば立ちならし水汲ましけむ手兎奈し思ほゆ

卷一〇

一八九〇 春日野の友鶯の鳴き別れ帰ります間aも思ほせわれをb
 一九〇四 梅の花しだり柳に折りまじへ花にまつらば君に逢はむかも
 一九三一 川の上のいつ藻の花の何時も何時も来ませわが背子時じけめやも
 一九六六 風に散る花桶を袖に受けて君が御為と思ひつるかも
 一九七四 春日野の藤は散りにて何をかも御狩の人の折りてかざさむ
 一九八八 鶯の通ふ垣根の卵の花のうきことあれや君が来まさぬ
 二〇〇二 八千戈やちほこの神の御世より乏し妻人知りにけり継ぎてし思へば
 二〇〇六 彦星は嘆かず妻に言だにも告げにぞ来つる見れば苦しみ
 二〇三九 恋しけく日長きものを逢ふべかる夕よだに君が来まさざるらむ
 二〇四六 秋風に川波立ちぬしましくは八十の舟津に御舟とどめよ

C・3

A・2

A・1

aはC・3 bはA・2

A・2

a bともA・1

B・1

A・1

A・3

C・3

A・1

A・3

A・2

A・1

A・3

- 二〇四八 天の河川門に立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き待たむ A・1
- 二〇六五 足玉も手珠もゆらに織る機を君が御衣に縫ひあへむかも a bとも A・3
- 二〇六九 天の河瀬ごとに幣を奉るころは君を幸く来ませと aは B・1 bは A・1
- 二〇八二 天の河川門八十ありいづくにか君がみ船をわが待ち居らむ A・3
- 二〇八四 天の河去年の渡瀬荒れにけり君が来まさむ道の知らなく A・1
- 二一五六 あしひきの山の常陰に鳴く鹿の声聞かすやも山田守らす児 a bとも A・2
- 二一六一 み吉野の石本さらず鳴くかはづうべも鳴きけり川をさやけみ C・3
- 二二五二 秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも A・1
- 二二七一 草深み蟋蟀多に鳴くやどの萩見に君はいつか来まさむ A・1
- 二二九五 わが屋戸の田葛葉日にけに色づきぬ来まさぬ君は何ころそも A・1
- 二三〇〇 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさばわれ恋ひめやも A・1
- 二三〇四 秋つ葉にほへる衣われは着じ君にまつらば夜も着るがね B・1
- 二三四八 和射美の嶺行き過ぎて降る雪のいとひもなしと申せその児に B・1
- 卷一一
- 二三七八 よしゑやし来まさぬ君を何せむにいとはずわれは恋ひつつ居らむ A・1
- 二三七九 見わたせば近きわたりをたもとほり今か来ますと恋ひつつそ居る A・1

- 二三八〇 愛しきやし誰が障ふれかも玉梓の道見忘れて君が来まさぬ A・1
- 二三八四 わが背子は幸く坐すと還り来むわれに告げ来む人も来ぬかも A・1
- 二四二四 紐鏡能登香の山も誰ゆゑか君来ませるに紐解かず寝む A・1
- 二四九〇 天雲に翼うちつけて飛ぶ鶴のたづたづしかも君いまさねば A・1
- 二五〇八 皇祖の神の御門をかしこみとさもらふ時に逢へる君かも aはA・3 bはB・1
- 二五三一 わが背子はその名告らじとたまきはる命は棄てつ忘れたまふな A・1
- 二五五五 朝戸を早くな開けそ味さはふ目が欲る君が今夜来ませる A・1
- 二五五六 玉垂の小簀の垂簾を行きかてに寝は寝さずとも君は通はせ aはA・1 bはA・2
- 二五六八 おぼろかにわれし思はばかりかたき御門をまかり出めやも aはA・3 bはB・1
- 二五七〇 かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ A・2
- 二五七三 情さへまつれる君に何をかも言はず言ひしとわがぬすまはむ B・1
- 二五八八 夕されば君来まさんと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする A・1
- 二六〇三 心をし君にまつると思へればよしこのころは恋ひつつをあらむ B・1
- 二六一三 夕卜にも占にも告れる今夜だに來まさぬ君を何時とか待たむ A・1
- 二六二九 逢はずともわれは怨みじこの枕われと思ひて枕きてさ寝ませ A・1
- 二六五五 紅の裾引く道の中に置きてわれは通はむ君や来まさむ A・1

二六六〇 夜ならべて君を来ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日は無し A・1

二七一〇 犬上の鳥籠とこの山にある不知いさま也川不知あとを聞きこせわが名告ならすな aはA・1 bはA・2

二七六二 蘆垣の中の似に児草こにこやかにわれと笑わらまして人に知らゆな A・2

二七六三 紅の浅葉の野らに刈る草の束の間も吾を忘らすな A・2

二八三七 吉野の水隈みぐまが昔すけを編あまなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや C・3

卷一二

二八七九 み空行く名の惜しけくもわれは無し逢はぬ日まねく年の経ぬれば C・3

二八八八 世の中の人の言葉と思ほすなまことそ恋ひし逢はぬ日を多み A・1

二八九三 朝あ去ゆきて夕は来ます君ゆゑにゆゆしくも吾は嘆きつるかも A・1

二九一七 うつつにか妹が来ませる夢にかもわれか惑へる恋の繁きに A・1

二九二九 夕よひ夕よひにわが立ち待つにけだしくも君来まさずは苦しかるべし A・1

二九三三 相思はず君はまさめど片恋にわれはそ恋ふる君が姿に A・1

二九六五 縁つるばみの衿の衣裏にせばわれ強ひめやも君が来ませぬ A・1

二九七八 真澄鏡まそかがみ見ませわが背子わが形見持たらむ時に逢はざらめやも A・1

三〇〇〇 魂たま合はば相寝むものを小山田の鹿猪ししだ田禁だもるごと母し守らすも (注) A・2

三〇〇五 望の日にさし出づる月の高高に君をいませして何をか思はむ A・1

三〇六一 暁の目さまし草とこれをだに見つ^aついで^bわを偲はせ
 三〇七七 みさご居る荒磯に生ふる莫告藻^{なりのそ}のよし名は告らせ父母は知るとも
 三〇七九 わたつみの沖つ玉藻の靡き寝む早来ませ君待たば苦しも
 三一〇〇 思はぬを思ふといはば真鳥住む卯名^{うなて}手の社の神し知らさむ
 三一〇二 たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか
 三一八六 曇り夜のたどきも知らぬ山越えています君をばいつとか待たむ
 三一九五 磐城山直越え来ませ磯崎の許奴美^{こぬみ}の浜にわれ立ち待たむ
 三二〇六 筑紫道の荒磯の玉藻刈るとかも君は久しく待てど来まさぬ
 三二一七 荒津の海われ幣^aまつり齋^{いは}ひてむ早還りませ面^{おも}変りせず
 aはB・1 bはA・1

卷一三

三二二九 齋串^{いくし}立て神酒^{みわ}すゑまつる神主部^{かむぬし}の髻華^{うず}の玉蔭見ればともしも
 三二七七 眠^いをも寝ずわが思ふ君はいづく辺^{こよひ}に今夜たれとか待てど来まさぬ
 三二八二 衣手にあらしの吹きて寒き夜を君来まさずは独りかも寝む
 三二九四 み雪降る吉野の嶽^{たけ}にゐる雲のよそに見し子に恋ひ渡るかも
 三三一九 杖衝^つきも衝かずもわれは行かめども君が来まさむ道の知らなく
 三三二二 門に座^ますわが背は宇智に至るともいたくし恋ひば今還りこむ
 A・1 A・1 C・3 A・1 A・1 B・1 A・1

古典短歌における敬語の実態とその特質

三三四二 沖つ藻にこやせる君を今日今日と来むと待つらむ妻し悲しも

A・1

三三四五 葦辺ゆく雁の翅を見るごとに君が佩ばしし投箭し思ほゆ

A・2

卷一四

三三五〇 筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着ほしも

a bともA・3

三三六九 足柄の崖の小菅の菅枕あぜか巻かさむ見ろせ手枕

A・2

三三七一 足柄の御坂畏み曇夜の吾が下延へを言出つるかも

A・3

三三八八 筑波嶺の嶺ろに霞る過ぎかてに息づく君を率寝てやらさね

A・2

三三九九 信濃道は今の墾道刈株に足踏ましなむ履着けわが背

A・2

三四二六 会津嶺の国をさ遠み逢はなはば偲ひにせもと紐結ばさね

A・2

三四三九 鈴が音の早馬馱家の堤井の水をたまへな妹が直手よ

B・1

三四四〇 この川に朝菜洗ふ児汝も吾も同輩児をそ持てるいで児賜りに

B・1

三四四四 伎波都久の岡の荃菲われ摘めど籠にも満たなふ背なと摘まさね

A・2

三四五五 恋しけば来ませわが背子垣つ柳うれ摘みからしわれ立ち待たむ

A・1

三四五七 うち日さす宮のわが背は倭女の膝枕くごとに吾を忘らすな

A・2

三四六七 奥山の真木の板戸をとどとしてわが開かむに入り来て寝さね

A・1

三四六九 夕占にも今夜と告らるわが背なはあぜそも今夜寄しる来まさぬ

A・1

三四七九 赤見山草根刈り除け逢はずがへあらそふ妹しあやに愛しも

A・2

三四八〇 大君のみこと畏み愛し妹が手枕離れ夜立ち来のかも

A・3

三四八四 麻苧らを麻笥にふすさに績aまずとも明日着せbさめやいぎせ小床に (注)

aはA・2 bはA・1

三四九五 伊波保ろの岨の若松かぎりとかや君が来まさぬ心もとなくも

A・1

三四九八 海原の根柔小菅あまたあれば君は忘らすわれ忘るれや

A・2

三五一〇 み空行く雲にもがもな今日行きて妹に言問ひ明日帰りこむ

C・3

三五一三 夕さればみ山を去らぬ布雲のあぜか絶えむと言ひし児ろばも

C・3

三五一五 吾が面の忘れむ時は国はふり嶺に立つ雲を見つつ偲はせ

A・2

三五二一 鴉とふ大軽率鳥の真実にも来まさぬ君を児ろくとそ鳴く

A・1

三五三五 己が命をおほにな思ひそ庭に立ち笑ますがからに駒に逢ふものを

A・2

三五五二 松が浦に騒多群立ち真人言思ほすなもろわが思ほのすも

A・1

卷一五

三五八〇 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

A・1

三五八一 秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ

A・1

三五八二 大船を荒海に出します君恙むことなく早帰りませ

a bともA・1

三五八四 別れなばうら悲しけむ吾が衣下にを着ませ直に逢ふまでに

A・1

- 三五八七 栲衾たくぎすま新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ
- 三六四四 大君のみこと恐み大船の行きのまにまにやどりするかも
- 三六四六 浦廻みより漕ぎ来し船を風早み沖つ御浦にやどりするかも
- 三六五六 秋萩ににほへるわが裳濡れぬとも君が御船の綱し取りてば
- 三六八二 天地の神を祈こひつつ吾待たむ早来ませ君待たば苦しも
- 三六八五 足姫たらしひめ御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は経につつ
- 三七〇五 竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君が御船をいつとか待たむ
- 三七二五 わが背子しけだし罷aまからば白栲の袖を振bらさね見つつ偲はむ
- 三七三〇 畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名のりつ
- 三七三六 遠くあれば一日一夜も思はずてあらむものと思ほしめすな
- 三七四六 人の植うる田は植ゑまさず今更に国別れして吾はいかにせん
- 三七四七 わが屋外やどの松の葉見つつ吾待たむ早帰りませ恋ひ死なぬとに
- 三七四八 他国ひとくには住みあしとぞいふすむやけく早帰りませ恋ひ死なぬとに
- 三七四九 他国に君をいませて何時までか吾が恋ひ居らむ時の知らなく
- 三七六四 山川を中に隔へなりて遠くとも心を近く思ほせ吾妹
- 三七六五 まそ鏡かけて偲へとまつり出す形見のものを人に示すな

A・1

C・3

C・3

A・3

A・1

A・3

A・3

aはB・1 bはA・2

C・3

A・1

A・1

A・1

A・1

A・1

A・1

B・1

三七六六 うるはしと思ひし思はば下紐に結ひ着け持ちて止まず偲はせ
 三七六七 魂はあしたゆふべに賜ふれど吾が胸痛し恋の繁きに(注)
 三七七四 わが背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな

卷一六

三八〇五 ぬばたまの黒髪ぬれて沫雪の降るにや来ますここだ恋ふれば
 三八〇九 商変し領らすとの御法あらばこそわが下衣返し賜らめ
 三八一七 かる曰は田廬のもとにわが背子はにふぶに咲みて立ちてます見ゆ
 三八四〇 寺寺の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りて其の子生まはむ
 三八五三 石磨にわれ物申す夏瘦に良しといふものぞ鰻取り食せ
 三八五八 此の頃のわが恋力しるし集め功に申さば五位の冠
 三八五九 此の頃のわが恋力給らずは京兆に出でて訴へむ
 三八六〇 大君の遣さなくにさかしらに行きし荒雄ら沖に袖ふる
 三八六一 荒雄らが来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まさぬ
 三八六五 荒雄らは妻子の産業をば思はずる年の八歳を待てど来まさぬ
 三八七二 わが門の榎の実もり喫む百千鳥千鳥は来れど君そ来まさぬ
 三八七六 豊国の企攻の池なる菱のうれを採むとや妹が御袖ぬれけむ

A・2
 B・1
 a bとも A・1
 A・1
 aは B・1 2 bは C・3
 cは B・1
 A・1
 a bとも B・1
 aは B・1 bは A・1
 B・1
 B・1
 A・1
 B・1
 A・1
 A・1
 A・1
 A・1
 A・3

卷一七

三八九七 大海の奥^かも知らず行くわれを何時来まさむと問ひし児らはも

三九〇一 み冬つぎ春はきたれど梅の花君にしあらば招^をく人もなし

三九〇二 梅の花み山と繁^{しむ}にありともやかくのみ君は見れど飽かにせむ

三九〇六 御苑生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と降りけむ

三九〇八 楯並めて泉の川の水脈^み絶えず仕へまつらむ大宮^を勉

三九二二 降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか

三九三〇 道の中国^aつ御神は旅行きも為^し知らぬ君を恵^bみたまはな

三九四九 天離る鄙にあるわれをうたがたも紐解き放けて思ほすらめや

三九九六 わが背子が国へましなばほととぎす鳴かむ五月はさぶしけむかも

三九九七 吾なしとな侘びわが背子ほととぎす鳴かむ五月は珠を貫^ぬかさね

四〇二一 雄神川紅にほふ少女らし葦^{あしつき}附採ると瀬に立たすらし

卷一八

四〇四五 沖辺より満ちくる潮のいや増しに吾が思ふ君が御船かも彼

四〇五〇 めづらしき君が来まさば鳴けと言ひし山ほととぎす何か来鳴かぬ

四〇五六 堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて知りせば

A・1

C・3

C・3

C・3

B・1

B・1

aはA・3 bはA・1

A・1

A・1

A・2

A・2

A・3

A・3

A・1

A・3

- 四〇五九 橋の下照る庭に殿建てて酒みづきいますわが大君かも
A・1
- 四〇六一 堀江より水脈引きしつ御船さす賤男の徒は川の瀬申せ
aはA・3 bはB・1
- 四〇六四 大君は常盤にまさむ橋の殿の橋ひた照りにして
A・1
- 四〇九五 ますらをの心思ほゆ大君の御言の幸を聞けば貴み
A・3
- 四〇九七 天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く
A・3
- 四〇九九 古へを思ほすらしもわご大君吉野の宮をあり通ひ見す
a bともA・1
- 四一〇八 里人の見る目恥づかし左夫流児にさどはす君が宮出後風
A・2
- 四一二八 草枕旅の翁と思ほして針ぞ賜へる縫はむものもが
a bともA・1
- 四一三三 針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ
B・1
- 卷一九
- 四一九〇 叔羅川瀬を尋ねつつわが背子は鵜川立たさねこころ慰に
A・2
- 四一九一 鵜川立て取らさむ鮎の其が鱗はわれにかき向け思ひし思はば
A・2
- 四二〇四 わが背子が捧げて持てる厚朴あたかも似るか青き蓋
B・1
- 四二〇五 皇神祖の遠御代 御代はい布き折り酒飲みきという此の厚朴
a bともA・3
- 四二二八 ありつつも見し 給はむそ大殿の此のほとりの雪な踏みそね
a bともA・1
- 四二三〇 降る雪を腰になづみて参り来し験もあるか年の初に
B・1

古典短歌における敬語の実態とその特質

四二三三 うち羽振はぶき鶏けいは鳴くともかくばかり降りしく雪に君きみいまさめやも

四二五五 秋の時花種くさきにありと色ごとに見みし明あむる今日の貴さ

四二五六 古へに君が三代経て仕へけりわが大主は七世申さね(注)

四二五七 手束たつかゆみ弓手ゆみに取り持ちて朝獵あさかりに君は立たしぬ棚倉の野に

四二六〇 大君は神にしませば赤駒のほらばふ田井を都となしつ

四二六一 大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ

四二六二 韓国からくにに行き足たらはして帰り来む大夫建男おほむねに御酒aたてまつる

四二六七 天皇の御代a万代aにかくしこそ見bし明bめ立つ毎年としのはに

四二七〇 律はふ賤しき屋戸も大君の坐まさむと知らば玉敷かましを

四二七一 松蔭の清き浜辺に玉敷かば君来まさむか清き浜辺に

四二七二 天地に足たらはし照りてわご大君敷き坐ませばかも楽しき小里

四二七三 天地と相栄えむと大宮を仕へまつれば貴く嬉しき

四二七四 天あまにはも五百いほつ綱延はふ万代あまに国知らさむと五百つ綱延ふ

四二七五 天地と久しきまでに万代に仕へまつらむ黒酒白酒を

四二七六 島山に照れる橘髻うづ華なにさし仕へまつるは卿大夫まへつきみたち

四二八〇 立ち別れ君がいまさば磯城島しきしまの人は吾じく齋いひて待たむ

A・1

A・1

B・1

A・2

A・1

A・1

aはA・3

bはB・1

aはA・3

bはA・1

A・1

A・1

A・1

B・1

A・2

B・1

B・1

A・1

四二八六 御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ

C・3

卷二〇

四二九八 霜の上に霰たばしりいや増しに吾は参来む年の緒長く

B・1

四三〇二 山吹は撫でつつ生さむありつつも君来ましつ挿頭したりけり

A・1

四三二一 畏きやみことかがふり明日ゆりや草がむた寝む妹なしにして

A・3

四三二五 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ

B・1

四三二六 父母が殿の後方の百代草百代いでませわが来たるまで (注)

A・1

四三二八 大君のみこと畏み磯に触り海原渡る父母を置きて

A・3

四三三〇 難波津に装ひ装ひて今日の日や出でてまからむ見る母なしに

B・1

四三四二 真木柱讃めて造れる殿のごといませ母刀自面変りせず

A・1

四三五八 大君のみことかしくみ出で来れば吾ぬ取りつきて言ひし子なはも

A・3

四三五九 筑紫辺に舳向かる船のいつしかも仕へ奉りて本郷に舳向かも

B・1

四三六一 桜花今盛なり難波の海押し照る宮に聞しめすなへ

A・1

四三六三 難波津に御船下す急八十楫貫き今は漕ぎぬと妹に告げこそ

C・3

四三七〇 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍にわれは来にしを

A・3

四三七三 今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは

A・3

古典短歌における敬語の実態とその特質

- 四三七六 旅行きに行く^と知らず^て母父^{あもし}に言申さず^て今ぞ悔し^け
- 四三八六 わが門^かの五株柳^{いつもと}いつも母^{おも}が恋ひ^すす業^{なり}まし^つつも
- 四三八九 潮船の舳越^そ白波^{には}はしくもおふせ賜^ほか思^はへ^{なく}に
- 四三九一 国^{やしろ}の社^の神^に幣帛^{ぬさ}まつりあがこひすなむ妹^がかなし^さ
- 四三九三 大君^のみ^{こと}に^されば^父母^を齋瓮^{いはひべ}と置^{きて}参^{りて}来^{にし}を
- 四三九四 大君^のみ^{こと}か^しこみ^弓の共^み真^た寢^さか渡^らむ^長け^{この}夜^を
- 四四〇二 ちはやぶ^る神^の御坂^に幣^{まつり}齋^ふ命^は母^父が^ため
- 四四〇三 大君^のみ^{こと}か^しこみ^青雲^のとの引^く山^を越^よて来^ぬか^む
- 四四〇九 家人^の齋^へにか^あら^む平^けく船^出は^しぬ^と親^に申^さね
- 四四一〇 み空^行く雲^も使^と人^はい^へど家^裏や^らむ^たづ^き知^らず^も
- 四四一四 大君^のみ^{こと}と^畏み^愛し^け真^子が^手離^り島^伝ひ^行く
- 四四二三 足柄^の御坂^に立^{して}袖^振ら^ば家^{なる}妹^はさ^やに^見も^かも
- 四四二四 色^深く背^なが^衣は^染め^{まし}を御坂^たば^らば^まさ^やか^に見^む (注)
- 四四二六 天地^の神^に幣^置き^齋ひ^つつ^いませ^わが背^な吾^をし^思は^ば
- 四四三二 障^へな^へぬ^みこ^とに^あれば^愛し^妹が^手枕^離れ^あや^に悲^しも
- 四四三六 闇^の夜^の行^く先^知ら^ず行^くわ^れを^いつ^来ま^さむ^と問^ひし^児ら^はも
- A・1
- A・3
- A・1
- aはA・3 bはB・1
- C・3
- A・3
- C・3
- C・3
- B・1
- A・3
- aはA・3 bはB・1
- A・3
- aはA・3 bはB・1
- B・1
- A・1
- A・1
- B・1
- A・1
- B・1

- 四四四〇 足柄の八重山越えていましなば誰をか君と見つつ偲はむ
 四四四四 わが背子が屋戸なる萩の花咲かむ秋の夕はわれを偲はせ
 四四四八 紫陽花あじさの八重咲く如く弥やつ代にをいませわが背子見つつ偲はむ
 四四五五 あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜のいとまに摘める芹子これ
 四四七二 大君のみことかしこみ於保の浦を背向そがひに見つつ都へのぼる
 四四八〇 畏きや天の御門をかけつれば哭のみし泣かゆ朝夕にして(注)
 四四八八 み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし
 四四九七 見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が来まさぬ
 四四九八 はしきよし今日の主人あぢは磯松の常にいまさね今も見るごと
 四四九九 わが背子しかくし聞こさば天地の神を乞ひ祈のみ長くとそ思ふ
 四五〇四 うるはしと吾が思ふ君はいや、日けに来ませわが背子絶ゆる日なしに
 四五〇六 高圓たかまの野の上の宮は荒れにけり立たしし君aの御代遠そけば
 四五〇七 高圓の尾の上の宮は荒れぬとも立たしし君aの御名忘れめや
 四五〇九 はふ葛の絶えず偲はむ大君の見しし野辺には標結しめゆふべしも
 四五一〇 大君の継ぎて見すらし高圓の野辺見るとに哭のみし泣かゆ
- A・1 A・1 aはA・2 bはA・3
 A・1 A・1 aはA・2 bはA・3
 A・1 A・1 A・1 A・1 C・3 A・3 A・3 A・1 A・1 A・2 A・1

(注) * 一一七一「さもらふ」は、貴人のそばにお仕えする意の謙讓語ではなく、「様子を見ながら待機する」の意と解して敬語か

ら除外した。(一八四の場合は敬語である。)

* 一四六二「賜る」は「たまはる」の転であるが、謙讓語と尊敬語の用法を持つ。ここでは前者と解した。一六一八・三四四〇・三八五九の「賜(給)る」も同じ。

* 一六七九「妻賜はにも」とあるのは「一に云はく」とあるのによつたものである。本文は「妻寄しこせね」。

* 三〇〇〇「母し守らすも」は「一に云はく『母が守らしし』」とあるが、「守らし」はやはり尊敬表現である。

* 三四八四「續まずとも」は、「ず」が尊敬の「す」とあるべきところ、直前の鼻音との関係で訛って濁音化したものである。ただし歌意からみると、打消の「ず」と解しても十分に成り立つ。

* 三七六七「賜ふれ」には諸説がある。ここでは謙讓の動詞(下二段活用)と解したが問題が残る。

* 四二五六「大主」は「ぬし」の尊敬語であるが、「吾が主」(八八二)と同様に、ここでは除外した。

* 四三二六「いでませ」は一語の動詞。ここでは「をり」の尊敬語である。

* 四四二四「たばら」には諸説がある。謙讓の動詞とみるほかに、「た」を接頭語、「まはり」を「廻り」とみて、それが「たばる」に転じたと解する考えがある。

* 四四八〇「御門」は天皇の意。

以上、万葉集の短歌四二二二首について、敬語を含む歌を抽出し、その待遇的意義や品詞に関する分析をしてみた。あらかじめ述べたように、その中には皇室敬語や特殊な敬語名詞を含んでいない。したがってこれをも含めて考えると、かなり膨大な敬語量となることは想像に難くない。以上の結果を統計的にまとめてみると、

表一

短歌数	敬語の種類			品詞			卷	
	全短 体の 歌	敬含短 語をむ歌	丁寧 語	謙讓 語	尊敬 語	接 辞 (名詞)		助動 詞
68	9	1	0	11	3	5	4	1
131	31	4	3	35	22	7	13	2
229	29	3	1	29	8	5	20	3
301	26	2	8	20	3	8	19	4
104	16	0	2	24	7	8	11	5
132	24	10	0	15	15	3	7	6
324	12	6	1	6	8	1	4	7
236	15	0	2	15	1	1	15	8
125	6	2	0	5	2	3	2	9
532	23	2	4	21	8	3	16	10
480	23	1	4	22	3	5	19	11
387	19	1	2	18	1	4	16	12
60	8	1	1	6	1	1	6	13
238	24	2	2	22	6	11	9	14
200	23	3	3	20	6	2	18	15
92	12	1	6	9	2	1	13	16
127	11	3	2	7	4	2	6	17
97	12	0	2	13	5	1	9	18
131	23	1	7	19	5	4	18	19
218	45	4	10	36	20	3	27	20
4212	391	47	60	353	130	78	252	合計

(注) 卷八の一六三五の歌は、連歌形式であるが短歌数に入れた。

古典短歌における敬語の実態とその特質

となった。敬語を含む歌は、全短歌の九・二八％に相当する。右の表についての分析は後でふれることとし、さらに一首中における使用敬語数を中心に調査したのが次の表二である。

表二

E	D	C	B	A	使用敬語数
					該当歌数
敬語五つ以上を含むもの	敬語四つを含むもの	敬語三つを含むもの	敬語二つを含むもの	敬語一つを含むもの	
0	2	3	57	329	

(注) * Bに所属する短歌は次のとおりである

* Cに所属する短歌は次のとおりである。
 4099 1247 11
 4128 1452 49
 4205 1460 77
 4228 1786 113
 4262 1890 173
 4267 2065 174
 4393 2069 178
 4402 2156 180
 4424 2508 181
 4506 2556 186
 4507 2568 188
 2710 205
 3061 235
 3217 737
 3350 441
 3484 454
 3582 554
 3725 636
 3774 680
 3840 700
 3853 814
 3930 877
 4061 1001

* Dに所属する短歌は次のとおりである。

879
882

* なお八八二の歌の「吾が主」を相手への敬称と考えると、一首における使用敬語数は五つとなる。

敬語の表現形式に、語の添加による接語方式と、語の交替による別語方式の二つのタイプがあることについては前述したとおりであるが、実はこの問題は、敬語と短歌、つまり定型詩としての短歌と敬語使用の関係を考えるにあたって、重要な一つの手がかりを与えるものとなる。その観点から万葉集短歌を分析したのが次の表三である。

合 計	別語方式 (交替形式)		接語方式 (添加形式)		卷
	計	使用敬語 (回数)	計	使用敬語 (回数)	
12	3	をす(1) 思ほす(1) 賜ふ(1)	9	す(5) み(3) ます(1)	1
42	10	ます(2) います(1) なす(1) まゐる(1) 思ほす(1) つかへまつる(1) さもらふ(1) いでます(1) めす(1)	32	み(22) す(7) ます(1) たぶ(1) たまふ(1)	2
33	16	ます(2) います(7) 奏す(1) いでもしどころ(1) 思ほす(1) こやす(2) 召す(1) 見す(1)	17	み(7) す(5) ます(4) たまふ(1)	3
30	12	著す(1) たまふ～下 2(1) 御幸(1) 賜る(2) います(1) まつる(1) 思ほす(1) 聞こす(1) まかる(1) 参来(1) 参り来(1)	18	ます(4) み(2) す(7) たまふ(2) る(1) まつる(1) います(1)	4
26	5	います(2) 申す(1) 賜ふ(1) 召上ぐ(1)	21	ます(2) み(7) す(8) 申す(1) たまふ(3)	5
25	5	ます(1) います(1) をす(1) 賜ふ(1) みゆき(1)	20	み(14) す(3) ます(2) たまふ(1)	6
13	2	まかる(1) います(1)	11	ます(2) み(8) す(1)	7
17	4	めす(1) 賜る(2) ます(1)	13	ます(11) み(1) す(1)	8
7	1	賜ふ(1)	6	み(2) す(3) ます(1)	9
27	6	思ほす(1) まつる(2) けし(1) たてまつる(1) 申す(1)	21	み(7) す(3) ます(11)	10
27	8	います(2) さもらふ(1) 寝す(1) まかる(1) まつる(2) 聞こす(1)	19	み(3) す(5) たまふ(1) ます(10)	11
21	7	思ほす(1) ます(1) います(3) 申す(1) まつる(1)	14	み(1) す(4) ます(9)	12
8	3	まつる(1) ます(1) こやす(1)	5	み(1) す(1) ます(3)	13

合 計	別語方式 (交替形式)		接語方式 (添加形式)		卷
	計	使用敬語 (回数)	計	使用敬語 (回数)	
26	6	けし(1) たまふ～下 2(1) 賜る(1) 寝す(1) せず(1) 思ほす(1)	20	み(5) す(11) ます(4)	14
26	8	います(3) 思ほしめす(1) 思ほす(1) まつる(1) たまふ～下 2(1) まかる(1)	18	み(6) す(2) ます(9) たまふ(1)	15
16	7	申す(3) 賜る(2) めす(1) つかはす(1)	9	み(2) す(1) ます(5) 賜る(1)	16
12	4	仕へまつる(2) 思ほす(1) ます(1)	8	み(4) す(2) ます(1) たまふ(1)	17
15	7	申す(1) ます(1) 思ほす(2) 見す(1) 賜ふ(1) 賜る(1)	8	み(5) す(1) ます(1) います(1)	18
27	13	捧ぐ(1) 見す(3) 参り来(1) います(2) 申す(1) ます(1) たてまつる(1) 仕へまつる(3)	14	み(5) す(4) ます(4) たまふ(1)	19
50	22	参来(1) 捧ぐ(1) まかる(1) いでます(1) います(5) 仕へまつる(1) まつる(2) 聞こしめす(1) 申す(2) 賜ふ(1) たばる(1) 賜ぶ(1) 聞こす(1) 見す(2) 参るて来(1)	28	み(20) す(3) ます(5)	20
460	149		311		合 計

(注) * 活用語はすべて終止形で示した。

* 一つの語が別語方式 (動詞) であるか, 接語方式 (補助動詞) であるか, その判断の微妙なものもあったが, 今は一応以上のように考えた。

(2) 万葉集の短歌における敬語の特徴

万葉短歌には敬語使用の実情から考えて、独自の傾向がみられる。とくにそれは後述する古今集との対比において著しい。具体的には、表一・表二・表三にあらわれているが、第一に指摘できることは、敬語が意外に多用されている事実である。歌数にして三九一首に敬語が使用されているが、これに名詞群に属する敬語を加えると、その使用敬語量はかなりのものとなるであろう。表一に徴するかぎり、品詞的にはなんといいても動詞（補助動詞も含む）が圧倒的に多く用いられ、それに反して助動詞が比較的少ないということが言えよう。動詞については表三を参照されたいが、万葉独自の動詞もいくつか見られるとともに、「たばる」など語性のユレているものも散見される。助動詞では尊敬の「す」が敬語量において大勢を占め、七八例中七七例を数えるにいたっている。それとは逆に、尊敬の助動詞「る」は一例（五六四）にとどまり、その点では「す」が圧倒的に優勢にあると言えよう。また名詞に接頭語「御」を冠するものが甚だ多く、敬語の一つの型となっている点も見逃しえない。尊敬語に比して謙讓語が少ないのも意外な事実であったが、これにはいくつかの理由が考えられそうである。

歌の内容からみると、帝に関するものに敬語が頻出し、とくに帝などの死を悼む歌に敬語が多用されている。巻二・巻一九などに、そうした傾向を見出すことができる。それと並んで、防人の歌にも敬語が多いということも指摘される。防人の歌は巻一三に一首―三三四五―（厳密には防人の妻の歌）、巻一四に五首―三五六七―三五七一―、巻二〇に九二首あるので、全体で九八首を数えるが、その中で敬表現を含む歌が二九首あり、約三分の一程度を占めている。

万葉の敬表現について、最も特徴的な事実は、一つの定まった型があることである。慣用的敬語（表現）とでも言えるものが、かなりの頻度で登場する。

* みよしののー(17) 一一三・二四四・三三三・三五三・九〇八・九一〇・九一一・九一二・九一五・九二一・

九二二・九二四・一一二〇・一一三〇・一一三一・二一六一・二八三七

* み立たし(の)ー(5) 一七八・一八〇・一八一・一八八・八六九

* 神にしませばー(5) 二〇五・二三五・二四一・四二六〇・四二六一

* 大君のみことかしこみ(9) 二九七・三六八・三四八〇・四三二八・四三五八・四三九四・四四〇三・四四一

四・四四七二

* 待てど来まさず(ぬ)(5) 四一八・一四〇九・三二七七・三八六一・三八六五

* 来まさぬ(ず)(じ)ー(20) 六八〇・一〇九七・一四五二・一四九九・一五〇一・一九八八・二〇三九・二

二九五・二三七八・二三八〇・二六一三・二九二九・二九六五・三二〇六・三

二八二・三四六九・三四九五・三五二一・三八七二・四四九七

* 来まさむー(8) 一五一九・二二七一・二五八八・二六五五・三三一九・三七七四・四二七一・四四三六

* 来ませー(7) 一六二一・二〇六九・二二五二・二六六〇・三〇七九・三一九五・三六八二

* 早帰りませー(4) 三二一七・三五八二・三七四七・三七四八

* 来ませるー(4) 一五二三・二四二四・二五五五・二九一七

* 来ませわがせこー (4) 四九一・一九三一・三四五五・四五〇四

* 来ますー (5) 一五一八・二〇四八・二三七九・二八九三・三八〇五

* つかへまつりし (まつらむ) (まつる)ー (7) 一七六・三九〇八・三九二二・四二七三・四二七五・四二七六・

四三五九

右以外にも、「来まさねば」(一六二〇)、「来まさば」(二三〇〇・四〇五〇)、「来まし(つつ)ー」(四三〇二)などの類似表現が目立っている。こうした事実からみると、「来ます」という敬表現が慣用的なものとしてすでに定着していたとみることができよう。また「君ませば」(二七四)、「君まさず」(一七二)、「君いまさねば」(四五七・二四九〇)、「君がいまさば」(四二八〇)などの類似表現も多く見られる。一七例を数えた「みよしの」^①という表現は、五音節を構成することから多用されるに至ったと考えられるが、その点で「み越路の」(一七八六・三七三〇)、「み熊野の」(四九六)、「御苑生の」(三九〇六・四二八六)と相通ずるものがある。接頭語の「み」は、万葉短歌では、「山・坂・門・神・船・酒・魂・世・狩・階・言」などの名詞に冠して用いられるのが普通であるが、中には「沖つ御浦に」(三六四六)のように「浦」に冠した例もある。

敬表現の形式(表三)からみると、敬語の総延数四六〇語のうち、接語方式をとるものが三一一語、別語方式をとるものが一四九語という結果となっている。したがって、ほぼ2対1の割合で、接語方式による敬表現が多いことになっているが、それは短歌と敬語の関係を考える場合にどう説明されるべきであろうか。短歌は定型詩というスペースの限定された宿命を持つ以上、情報量の点で変化のない敬語を用いることは、一般的な意味で望ましくない

いことである。かりに敬語を用いたとしても、接語方式によるよりも、別語方式による方が、よりスペースをとらなくてすむという事実がある。それはたとえば、「おはしけるままに」と「行きたまひけるままに」、の関係を考えれば明らかであろう。それにもかかわらず、接語方式による敬表現が多用されているのは、別語による言いかえの不可能な語が多いからだとも考えられるし、また別語の方が、ことばによってはかえって音節数が多くなってしまうということも考えられよう。そしてまた、万葉短歌に限って言えば、接語方式に属する語に、一音節か二音節のものが多くあるという事情が考え合わされなければならぬ。「す」「み」「ます」などの語がそれであって、こうした敬語の発達が短歌のスペースのなかに無理なく同居できる結果を招いたのだと思われる。ともあれ、短詩型文学としての短歌であるから、敬語が用られないのだとする考えは、やや短絡に過ぎた仮説とすべきである。たしかに敬語が用いられにくいという事情は肯定できるとしても、その理由は詩型以外の点にも求めなければならない。すくなくとも万葉短歌にみるかぎりではそう考えざるをえないのである。

三

古今集（短歌）における敬語使用の実態

万葉集から約一五〇年ほど後に成立したと考えられている古今集の敬語について考察をすすめる。古今集は短歌数一〇〇二、長歌（諸本には「短歌」と記載されているが）五、旋頭歌四という構成であるが、本稿では前述した万葉集の場合と同様に、短歌のみを対象として敬語使用の実態を調査することとした。

(1) 敬語の用例と種類・品詞

卷一

- 三 春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ C・3
- 一八 み山にはまつの雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり C・3
- 六〇 みよし野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける C・3

卷五

- 三一〇 み山よりおちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる C・3

卷六

- 三一七 ゆうされば衣手さむしaみよしののよしbの山にみゆきふるらし a bとも C・3
- 三二一 ふるさとはよしのの山しちかければひとひもみゆきふらぬ日はなし C・3
- 三二五 みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり C・3
- 三二七 みよしのの山のしらゆきふみわけて入りにし人のをとづれもせぬ C・3
- 三三三 けぬがうへに又もふりしけはるがすみたちなばみゆきまれにこそみめ C・3

卷七

- 三四五 しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみよをばやちよとぞなく A・3
- 三六三 白雪のふりしく時はみよしのの山した風に花ぞちりける C・3

古典短歌における敬語の実態とその特質

卷九

四一九 ひととせにひとたびきます君までばやどかす人もあらじとぞ思ふ A・1

卷一〇

四三一 みよしののよしののたきにうかびいづるあはをかたまのきゆとみつらん C・3

卷一四

六九九 みよしのおほかはのべのふちなみのなみにおもはばわがこひめやは C・3

卷一五

七五四 花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらんかずならぬ身は A・2

七五八 すまのあまのしほやき衣おさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ A・1

卷一六

八四五 水のおもにしづく花の色さやかにもきみがみかげのおもほゆるかな A・3

八五二 きみまさで煙たえにししほがまのうらさびしくもみえわたるかな A・1

卷一八

九五〇 みよし野の山のあなたにやども哉世のうき時のかくれがにせむ C・3

九五一 世にふればうきこそまされみよしののいはのかけ道ふみならしてん C・3

九六六 つくばねのこのもとごとくにたちぞよる春のみ山のかげをこひつつ

C・3

九八二 わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

A・1

卷二〇

一〇七四 神がきのみむろの山のさかきばは神のみまへにしげりあひにけり

a bともA・3

一〇九一 みさぶらひみかさと申せ宮木のこの下露はあめにまされり

a bはA・3 cはB・1

一〇九五 つくばねのこのもかにもに影はあれど君がみかげにます影はなし

A・3

なお右に掲げた二十五首のほかにも、

一一八 吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや

(卷二)

五六〇 わが恋はみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

(卷一二)

八七五 かたちこそみ山がくれのくちななれ心は花になさばなりなん

(卷一七)

一〇七七 み山にはあられふれふるらしと山なるまさきのかづら色づきにけり (卷二〇)

の四首も該当すると考えられるが、一一八・五六〇・八七五の歌は、「み山がくれ」となっているし、また一〇七七の歌は「と(外)山」と対しているの、今は一応「深山」と見て敬語から除外した。また、七五四の歌は「わすられぬらん」の「れ」の語性を受身とみることも可能であるので問題が残りそうであるが、今は尊敬語として扱った。以上の用例に基づいて、古今集短歌を統計的にまとめてみると次のような結果(表四)が得られた。

表四

短歌数	敬語の種類				品詞			巻
	全体の短歌	敬語を含む歌	丁寧語	謙讓語	尊敬語	接辞(名詞)	助動詞	
68	3	3	0	0	3	0	0	1
66	0(1)	0(1)	0	0	0(1)	0	0	2
34	0	0	0	0	0	0	0	3
80	0	0	0	0	0	0	0	4
65	1	1	0	0	1	0	0	5
29	5	6	0	0	6	0	0	6
22	2	1	0	1	2	0	0	7
41	0	0	0	0	0	0	0	8
16	1	0	0	1	0	0	1	9
47	1	1	0	0	1	0	0	10
83	0	0	0	0	0	0	0	11
64	0(1)	0(1)	0	0	0(1)	0	0	12
61	0	0	0	0	0	0	0	13
70	1	1	0	0	1	0	0	14
82	2	0	0	2	0	1	1	15
34	2	0	0	2	1	0	1	16
70	0(1)	0(1)	0	0	0(1)	0	0	17
68	4	3	0	1	3	0	1	18
59	0	0	0	0	0	0	0	19
32	3(1)	0(1)	1	5	5(1)	0	1	20
11	0	0	0	0	0	0	0	墨滅歌
1002	25(4)	16(4)	1	12	23(4)	1	5	合計

(注) 一〇九の歌は六四の歌と同一。考えた場合である。
 *** 卷一内は除外した四首を六四の歌と同一。考えた場合である。
 *** 卷一九の誹諧歌をも含む。

表五

	使用敬語数	該当 歌数
A	敬語一つを含むもの	22
B	敬語二つを含むもの	2
C	敬語三つを含むもの	1
D	敬語四つ以上を含むもの	0

古今集の短歌の中で敬語を含む歌は、全短歌数の二・四九％にすぎず、除外した四首を含めたとしても、二・八九％程度であって、万葉集の九・二八％に比較するまでもなく、激減の傾向を見せている。また一首中における使用敬語数を調べたのが上の表五である。

(2) 古今集の短歌にみられる特徴

すでに述べた表四・表五によって理解できることであるが、万葉集とは全く異なった様相を呈しているのが古今集短歌における敬語（表現）

である。品詞的にみると、動詞（補助動詞も含む）や助動詞は著しく少なくなり、それとは逆に、接頭語による敬表現と丁寧（美称）語が多用されている。しかも動詞は、「申す」一例を除いて四例とも尊敬語であって、すべて「ます」となっている点が異色である。万葉集での「ます」の多用ぶりに比較するまでもなく、その衰退ぶりが目を引く。確実に言えることは、「ます」は中古ではほとんど用いられることがなくなり、化石的に和歌の用語としてその痕跡をとどめるに至ったという事実である。体言を構成する接頭語「み」が比較的多くて、二三例を数えてるのは、一〇四九の歌のように単に「吉野」となっているものもあることから考えて、やはり五音節構成とは無縁ではないからであろうし、また音調を整えることも有縁であるためであろう。「日本古典文学大系『古今和歌集』」の解説（一八ページ～一九ページ）によれば、「万葉・古今・新古今の三集に用いられている体言数は、一首平均四・一、四・五、五・〇箇含まれることが第Ⅱ表から知られ、歌境が漸次複雑になってきていることが考えら

れる。また用言と体言との比率は、用言一に対してそれぞれ一・〇三、一・一五、一・五七となっているから、体言と用言のバランスのとれた万葉集を基準とした場合、古今集・新古今集と内容が豊かになるにつれ用言が省略され、体言型の文章構造を示していることが知られる。」と説明されているが、そうした古今集の傾向の中で、「み+体言」の問題を捉え直すこともできるわけである。その型の中でもたとえば、万葉集で一七例を数えた「みよしの」 という表現が、古今集の全敬語二九語中一〇語を占めているのは、単に伝統的な表現を踏襲した結果と考えるよりは、歌の内容や歌風がもたらした必然的な理由によるものとみるべきである。

万葉集においては接語方式が別語方式よりも多かったが、古今集においては接語方式二七に対し別語方式二となっていて、その差がより明確になっている点も見逃がしえない。このことについては再論を避けるが、今一つ問題になるのは、古今集の場合には贈答や問答の歌のときにも敬語を使用していない事実である。たとえば六二と六三、七〇六と七〇七、七三六と七三七、一一〇八と一一〇九などがそれに該当するが、万葉集では敬語を用いている場合がかなり目立つ。たとえば、一四六〇と一四六二、また中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌では、娘子の歌三七二五・三七四六・三七四七・三七四八・三七四九・三七六七・三七七四に対応して、宅守の三七三〇・三七三六・三七六四・三七六五・三七六六の歌にそれぞれ敬表現が用いられている。これ以外にもかなり多く用いられていて、この点でも古今集との敬語使用の実態の違いを見ることができ。

伊勢物語（短歌）における敬語使用の実態

王朝の歌物語である伊勢物語には、第六九段の連歌形式の歌も含めて二〇九首の短歌がある。ほかに「定家本にない章段」が一八段存在し、その中に二三首の短歌が含まれているので、合計して二三二首ということになる。敬語が使用されている短歌は、その中の四首に過ぎず、甚だ少ないものとなっている。

みよし野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる (二〇段)

わが方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘れむ (一〇段)

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ (一六段)

ひととせにひとたび来ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ (八二段)

表六

合計	敬語の種類			品詞		
	丁寧語	謙讓語	尊敬語	接辞 (名詞)	助動詞	動詞
6	2	0	4	4	0	2

周知のように、伊勢物語の歌は、万葉集・古今集（六二首）・古今六帖・拾遺集・後撰集などの歌と重複したり、またその改作であったりするものが甚だ多く、右の四首にしても、一〇段の二つの歌は、ともに古今六帖と、また八二段の歌は古今集と、それぞれ重なりあったものである。

今、右の四首の歌に用いられている敬語のなかで、「みけし」は、接頭語「み」に「けし」（「着る」の尊敬語「けす」の名詞）が加わった形と考え、「たてまつり」を着るの尊敬語（「さし上げる」意の謙讓語とみることもできようが）と理解して、使用敬語を分析すると上記の結果（表六）となる。

また、さらに敬表現の形式からみると、接語方式が四（「み」「ます」）、別語方式が二（「たてまつり」「けし」となる。

伊勢物語の短歌には、以上のように圧倒的に敬語が少ないのであるが、これを地の文との関係で捉えてみると次のような傾向がみられる。

第一に官職名や人名が具体的に書かれている場合には、地の文に敬語が多用されていることがあげられる。当然のことではあるが、三・四・五・六・一六・三九・四三・六五・七六・七七・七八・七九・八一・八二・八三・八五・九八・一〇一・一〇三・一〇六・一一四・一一七・一三六などの各段がそれである。ところで、このなかで歌に敬語が用いてあるのは、一六・八二の二つの段に過ぎない。第二に、地の文における人物表現が単に「おとこ」「をんな」となっている場合には、敬語を地の文中で用いない傾向にあるが（一・二・七・八・一一・一二・八六・八七・八八・八九・九〇・九一・九二・九三など）、歌にも全く敬表現が見当らない。しかしまた、第三に、「おとこ」「女」「友」などと人物が表現されている場合でも、地の文に敬表現（九・「御もと」）がみられることもあり、一様ではないが、こうした場合には、会話や書簡文に敬表現がみられることが多い。（九・二四・四六・六二・九四など。）

人物表現と敬表現との間には、なにか原則的に一つの関係が認められるが、それは原則の域にとどまるものであって、その点で敬表現の任意性が感じられる。身分差が明らかかな場合に敬表現が用いられることは理解できるが、それにしても地の文どまりで歌にはほとんど皆無に近い事実は否定できない。

古典短歌における敬語をどう考えるか

本論のなかで一部、現代短歌をも対象にしながら、万葉集・古今集そして伊勢物語の順で、古典短歌における敬語使用の実情について考察してみたわけである。総論的に言えば、万葉集で予想以上の敬語量がみられたのに反して、古今集では詞書にかなりの敬語が用いられてはいるものの、短歌においては極端に過ぎるほど減少している。さらに伊勢物語に至っては、地の文では敬表現がある場合とない場合とが混在し、短歌では圧倒的に敬表現が少なくなっている事実が判明した。表現を変えると、万葉集はともかくも、王朝短歌では、敬語を用いているのは極端に少ないということである。こうした傾向は、伝奇文学である竹取物語にもみられるもので、物語中一五首の短歌で、敬語が用いられているのは次の一例にしかすぎない。

帰るさのみゆき物うく思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

以上のような事実をどう説明すべきであろうか。情報量のうえでなんの増減もない、その意味で非生産的な敬語は、スペースの限られた短歌では負担しきれないからだとする事情もあるであろう。しかしそれだけでは以上みてきた複雑な実態を説明するには適切さを欠くと思われる。すでに述べたように、別語方式の敬語よりも接語方式の敬語が多く用いられている点から考えても問題は残りそうである。

古今集仮名序の一節に、「おとこ女のなかをもやはらげ」とも、また、「いろごのみのいへに、むもれぎの人し

れぬこととなりてまめなる所には、花すゝき、ほにいだすべき事にもあらずなりたり。」とも発言していることから、当時における短歌の置かれた事情が察知できるわけで、そうした私的な男女間の消息文として用いられたために、それが敬語不要に連動したとも考えられるのである。万葉集の、君臣関係という身分差が判然としている短歌において、敬語が多用されている事實は、まさにその逆証明であると考えられる。しかし一方では、現実の身分差を投影させない、一種の平等意識が歌の世界にあったことも考えられ、それが男女間の恋歌の世界では、とくに支配的であったことも敬語を用いないですむ大きな要因とも言えるのではないか。

以上の二点は、短歌の持つ社会的な機能と主体的な意識の問題として捉えてみたわけであるが、短歌自体に内在する事情もまた無視することはできない。それは最初に述べた短詩型文学という宿命からくるスペースの問題であり、また短歌が感動の中心であるという事実―したがって敬表現を必要とするまでもなかったという点である。

古今集の短歌は、用言の使用度が少なく体言型の文章構造をみせているのに対し、万葉集の短歌は用言と体言のバランスがとれている。その点については、すでに言及したが、用言が多用されるということもまた敬語動詞の使用度数と無縁ではないように考えられるのである。古今集の短歌では、美称の接辞が敬語のほとんどを占めている。それは次第に装飾敬語としての性格を強めつつあることを意味するもので、敬語量が激減している事實は、短歌としての独自性や文学性を獲得することと表裏しているとも言えるであろう。